

『琴用指法』の写本学的研究

楊元錡

彦根城博物館所蔵の卷子本『琴用指法』は様々な意味で琴楽の最も興味深い史料の一つである。これは初期琴楽と同時代に属する史料であり、ここに含まれる琴演奏に関するいくつかの指法書は現存最古のテキストとなっている。また、その紙背には催馬楽の若干の草稿と漢詩、三箇所絵がある。

初期琴楽に関する純粋な中国あるいは中国伝来の実践的論著を収める日本の唯一の史料として、『琴用指法』が古代東アジアにおける音楽伝播の研究において極めて重要な位置を占めることは明白である。しかるに、長らくその内容が多く転写本を通して間接的にのみ入手されてきた一方で、原本そのものは井伊家の文書の中に数世紀間埋もれており、五島邦治による 1994 年の再発見までは現代の学界では知られていなかった。

そのため、この重要史料に対する理解はいまだに不十分である。これまで原本の徹底的な写本学的研究がなされておらず、その由来は不明なままで、内容目録も完全ではない。筆者はこの空白に対処するために、現在進めている史料研究の一環として、2004 年 11 月に『琴用指法』の詳細な調査を行った。本稿はその一端の報告である。写本学的分析の方法を用いて史料の物理的側面を明らかにし、その外的特徴を初めて詳細に記述したものであり、筆跡分析の成果と書写の順序の再構成、および内容の完全な一覧を含んでいる。